【香川オリーブガイナーズ賞】

助け合いの輪

土庄町立土庄中学校　三年　佐伯莉奈

あっ…終わった。私は修学旅行一週間前の体育の授業中にケガをした。病院に行くと骨折と言われた。修学旅行に行けるかどうか不安になった。しかし、車椅子に乗ってなら行けるだろうということになりうれしかったが、それはそれで大変そうだと心配になった。

そして、迎えた修学旅行当日、実際に行ってみると、クラスメイトが車椅子を交代で押してくれた。長崎市内の班別行動では、段差のあるところでは班の人たちが車椅子を持ち上げてくれたり、代わりに食べ物を買ってきてくれたりした。遊園地でも、友だちやアトラクションの係員の人が乗り降りを手伝ってくれた。バスや新幹線では、バスガイドさん、先生たちが荷物を持ってくれたり、荷物を上げたりしてくれた。ホテルでは、エレベーターが苦手な友だちが私のために一緒に乗ってくれたり、他のお客さんがエレベーターを譲ってくれたりした。お店では、店員さんが車椅子でも店内に入りやすいように物を移動させてくれたり、車椅子のまま食事しやすいように席を用意したりしてくれた。修学旅行の間、私はいろいろな人の手を借りた。おかげで無事に修学旅行から帰ってくることができ、とても助かったしうれしかった。同時に、申し訳なくも思った。

こんなにいろいろ手伝ってもらって、私は「みんなにどのように恩返しをしたらよいのだろう。」と考えていた。同じ学校の人たちに恩返しする機会はあるかもしれないけれど、よくしてもらった人に同じくらいのことをすべてお返しするのは難しいと感じていた。そのことを母に話すと、「よくしてもらった本人にすべて返そうと思うのではなく、困っている人がいたら手伝ってあげたら？今度はその人が違う困

っている人を手伝って、優しい輪が広がって、みんな助かるから。」と話してくれた。

母がそう考えるのは、ある出来事があったからだ。母が受験生だったとき、試験会場で消しゴムを忘れたことに気づき、思わず「あっ…消しゴム忘れた」と口に出してしまった。すると、隣の席に座っていた見ず知らずの人が、自分の消しゴムを半分に割って「あげる」と渡してくれたのだそうだ。母は、「エッ？」と驚いた顔で見ると、その人は「なかったら困るでしょ」とにっこり。おかげで母は無事に試験を終えることができた。その後、しばらく母はその消しゴムをお守りとして持っていた。それ以来、いつも消しゴムを二つ以上筆箱に入れるようにして、消しゴムを忘れた友だちに貸していた。消しゴムを貸してくれた人とその後出会うことはなかったが、母が消しゴムを貸した友だちにはその話をした。すると、みんなが「いい話ね。私も見習うね」と言ってくれたそうだ。

その話を聞いた私も素敵な話だと思った。修学旅行前に骨折したことでたくさんの人に迷惑をかけたけれど、そのおかげでいろいろな人の優しさに触れた。そして、母の素敵な昔話を聞くこともできた。ほんの些細なことだとしても、助けてもらった人の本当に助かったという感情は、何年経っても何十年経っても覚えているにちがいない。私も、この修学旅行のことは一生覚えているよい思い出になると思う。

そして、私も困っている人がいたらお手伝いをしたい。学校では、様々な人権課題について学習する時間がある。「何に困っているのだろう」「困っていても言えない雰囲気にしていることがあるのかもしれない」今まで私が気づかずにいた困っている人たちの思いを学んでいる。お互いに学び、理解し合おうと努力することも「助け合いの輪」を広げていく大切な方法だ。「助け合いの輪」が広がっていけば、社会が今よりきっと明るくなるはずだ。